OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	現代語訳に推測される中古助動詞「き・けり」の「過去」表現の意義
Author(s)	重見, 一行
Citation	語文. 1999, 72, p. 39-49
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68945
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

現代語訳に推測される
中古助動詞「き・けり」の「過去」表現の意義

重見一行

はじめに

中古の物語作品等を中心として見出される「べかりし（ける）」「まじかりし（ける）」なる連体法表現（表Ⅰ―「まじ」は省略）に対する現代語訳は、相当難渋されるものと思われる。勿論その根本には「べし・まじ」の中古語としての意義の理解しにくさがある事は言うまでもないが、一面で「き・けり」の意義と使用法が現代語「た」と異なる事も、一つの問題であると考えられる。本稿は、かかる「き・けり」と「た」の相異を、逆に原中古文とその現代語訳文の比較において、推測してみようとするものである。

一　「き・けり」と「た」

論を始めるに当って、中古語「き・けり」と現代語「た」の西欧的テンス論にどの程度適応し得るのかという、筆者の見通しを述べておく事が必要と考える。

まず「き・けり」であるが、これ等の助動詞が、物理的に規定し得るごとき「過去」の意義を表現し、あるいは物理的に規定し得る過去の事態の表現に必ず用いられるごとき、単純な機械的マーカーではあり得ぬ事については、特に「けり」で種々議論されて来た所であり、いまさら山田孝雄氏や細江逸記氏のムード論等をふりかえる必要もないかと思われる。この点については、筆者も最近の鈴木泰氏の論（鈴）[1]等をふまえて、一試案として次のごとき客体的表現意義を提出しておいた（重a 289p）。

き＝話手の発話時現在の位置の基準において、上接動詞の動作またはそれを述語とする叙述の事象のすでに成立した事が、即時的に明確である状況

けり＝話手の発話時現在の位置の基準において、上接動詞の動作またはそれを述語とする叙述の事象のすでに成立した事が、その状態または残影の存続において明確である状況

そして、右のごとき表現意義から、「き・けり」の両者の共通的表現意義において、西欧文法論的テンス論としての「絶対的（ダイクティックな）過去」の意義を認める事は、不当ではないとしたのである。

表Ⅰ「べかりき（けり）」の使用

		落窪	宇津保	源氏	浜松	夜寝覚	狭衣	枕	蜻蛉	更級	栄花	大鏡	今鏡	計
連体法	き		6	15	3		5	2	1		3	1	6	42
	けり	2	9	26	4	8	4		1	1	9	1	3	68
接続法	き			2		1					5	1		9
	けり		3	1	2	2	1		2		3			14
終止法	き		3	3							2	1		9
	けり	1	8	30	2	11	9	5	7	2	9	1	4	89

○連体法－「を、に、もの、こと、ほど」への連接を含む
接続法－「ば、ど、ども」（確定条件）への連接
終止法－係結びも含む
○次の索引を利用
落窪－落窪物語総索引（松尾他）
源氏－源氏物語語彙用例総索引（上田他）
夜寝覚－夜の寝覚総索引（阪倉他）
枕－枕草子総索引（松村）
更級－更級日記総索引（東）
大鏡－大鏡の研究（秋葉）
宇津保－宇津保物語本文と索引（研究会）
浜松－浜松中納言物語総索引（池田）
狭衣－狭衣物語語彙索引（塚原他）
蜻蛉－かげろふ日記総索引（伊牟田）
栄花－栄花物語本文と索引（高知大）
今鏡－今鏡本文及び総索引（榊原他）

次に現代語「た」についてであるが、主として、工藤真由美氏の論（工）によりながら、筆者はその共通的表現意義を別に論究した（重b）。結論として次のごとき各体的な共通の表現意義とした。

た＝運動（出来事）の実現

しかし、これを西欧的テンス・アスペクト論に沿って考えるならば、本節末述語に用いられた場合と、従属節的部分に用いられた場合では、区別する必要があると思われる。すなわち、本節述語に用いられた場合は、基本的に「絶対的（ダイクティックな）過去」の表現意義と言えるに対して、(2) 従属節中（筆者の直接考察したのは連体法）の場合は、絶対的過去の表現意義と解すべき場合もあるが、基本的にはアスペクト乃至タクティックな相対的過去の表現意義と考えられるものであった。そしてこの点で言えば、工藤氏がアスペクト的意義と相対テンス的意義に密接な関係を見出すごとく（工226p）、また松木正恵氏が、すべてをテンス的観点から統一的に説明し得ると予想するごとく（松b12p）、かかる従属節中の「た」は、相対的過去の表現意義として、本節中の「た」に対応理解する事も可能であると考えられる。そしてその事は、逆に本節述語における絶対的過去表現性も、「た」が基本的に有している、その文中の位置による解釈性・文脈依存性からすれば、従属節中の「た」と同様、相対的過去の表現意義の一種（発話時を基準とする）として、共通的に理解し得るとしたのである。

以上のごとく筆者は、「き・けり」には絶対的過去表示性としての共通性を、「た」には相対的過去表示性としての共通性を認定した。一応かかる理解の上に立って、以下更に二者の相異を考察してみた

い。

二　「き・けり」は「存在の情報」表現

まず一つの相異を提出してみよう（以下原中古文は岩波旧古典大系〈源氏物語〉により、現代語訳は(大)＝岩波旧大系・(新)＝岩波新大系・(全)＝小学館新編日本古典全集・(集)＝新潮日本古典集成・(玉)＝玉上琢弥〈源氏物語新釈〉による）。

(1)わりなう思さばさもありぬべかりし年頃はのどかに過ぐい給ひて（一393ｐ）

(大)かつて朝顔への恋がきっと成就するに相違なかった若い年頃は

(新)ぜひにとお思いなら結婚もきっとかなったはずの今までの年月は

(全)是が非にもと執着していらっしゃったら、きっとかなえられもしたにちがいない年月の間は

(集)ぜひにとお思いなら縁組もできたはずの今までは

(玉)無理にでもとお思いなさるなら、しようもあったにちがいない。昔のころは

(玉)のみが、「べかりし」で文が切れるごとき訳になっているが、原文の記載法は全く他と相異がない。一応他の訳と同様、連体法的訳であると理解しておく。ここには「べし」について「相違ない・ちがいない・はずだ」の三通りの訳が見出せる。この「はずだ」については、佐田智明氏が、古代語「べし」の意味の一部に相当すると言うごとく(佐)、一つの適訳と考えられるが、その表現意義については、高橋太郎氏が「みこみ」と「さとり」に二分した(高)。この(1)の訳としての意義は「みこみ」、すなわち事が当然そうなるという「予定や推定」(高80ｐ)を表現するものとして、端的には「推量」表現の一類として、「相違ない・ちがいない」と共通するものと考えてみよう。

筆者がここで問題にしたいのは、「た」の使用された位置である。五訳のうち、(大)のみが「相違なかった」と、「べし」に相当する訳語の後に置いている。これに対して他の四訳は前に置いている。これ等「相違ない・ちがいない・はずだ」の場合、現代語としては一般に「た」を前に置く場合も後に置く場合もある。

たに相違ない　相違なかった
たにちがいない　ちがいなかった
たはずの　はずだった

この点は他の推量系「ようだ・らしい・みたいだ」等にも見出せる（丹等）（両様を有しない「そうだ・だろう」がある）。

右の二通りを有する語においては、終止法の場合も同様であるが、むしろ終止法の方に普通に両様が見出せる（表Ⅱ）事については注意をうながしておきたい。

先に筆者は、「た」においては文末の述語使用の場合絶対的過去の表現意義を有するとした。この点で右の推量系の語に併用された「た」の理解は、文末の述語に用いられた場合が解釈しやすいと思われる。今「はずだ」の場合を代表的に考えてみる（以下例文は、中古文例も含めて、小説類を引用する事となるが、それは、実際の発話として「文」単位に考えた例証であって、「小説」としてのテキスト的見地からのものではない事を一応ことわっておきたい）。

(2)ａ多分草鹿少佐のこの文書を見たはずである　（山本）(3)

表II 「た」と推量語の位置関係

		A		B		C		D		E		計	
		連体	終止	連体	終止	連体	終止	連体	終止	連体	終止	連体	終止
はずだ	たはず	1	10	0	1	3	3	0	0	0	0	4	14
	はずだった	2	2	0	0	0	11	0	1	0	0	2	14
	はず	5	12	0	10	17	21	0	1	0	0	22	44
ようだ	たよう	18	38	16	11	122	7	60	4	10	3	226	63
	ようだった	0	2	0	11	1	95	0	23	0	19	1	150
	よう	133	18	27	10	196	18	210	9	42	5	608	60
らしい	たらしい	4	79	3	3	5	10	4	22	0	5	16	119
	らしかった	0	7	0	1	1	8	0	18	0	4	1	38
	らしい	1	23	2	13	7	9	0	37	2	2	12	84

○A－阿川弘之〈山本五十六〉　B－松本清張〈点と線〉　C－北杜夫〈楡家の人びと〉
D－曽野綾子〈太郎物語〉　E－有吉佐和子〈華岡青洲の妻〉
（新潮百選フロッピー版による）
○用言に接続する場合のみを対象とする。
○連体＝連体法「～のは～」の「の」に連接する場合を含む。
終止＝終止法「が、のに、けれど、ので、から、と」の接続助詞に連接する場合、「のだ、のである」に連接する場合を含む。

b突撃命令を待つ位置へ移るはずであった　（山本）

aの場合は、「はずだ」なる推量表現が、「た」の後に来る事によって、「文書を見る」なる運動の「た」によって規定された過去の成立を、発話時現在から推量している表現と理解出来よう（松b16p）。従って、推量しているのは発話者である。これに対してbは、「移る」運動そのもののみならず、「はずだ」なる推量行為も、過去に行われた表現という事になる（松b19p）。従ってこの場合の推量行為者は、実際には発話者であっても、表現のあり方としては、発話者に限定されるものではなく、いわば誰でもがそのように推量する事になる過去の一客観的事態として表現したものと解釈しなければならぬ（丹23p）。この点を今日の日本語モダリティ論的に言えば、aの表現は、命題乃至言表事態部分とモダリティ乃至言表態度部分（益・仁）の分水嶺を「た」が担う（仁18p）点で、「見る」なる運動表現は客観的（客体的）表現意義を有するが、「はずである」は、発話者の推量する心的行為の直接的主体的表現、すなわちモダリティの表現部分という事になる。これに対してbは、「移るはずである」なる推量的表現意義を含み込んだ全体が、いわば推量されてしかるべき客体的事態を表現している、という事になる（「はずだ」は疑似モダリティ―仁52p）。ただし、筆者としては、時枝詞辞論的二分論は不当と考えるので（重d等）、aの「はずである」も、発話時現在における推量さるべき一つの客体的事態（端的に言えば蓋然的事態）の表現という解釈が成立する事は、一応断わっておかねばならぬ（発話者が現実に推量しているという事と、その結果が言語化され、一つの客体的世界の表現意義を獲得する、という事は区別して考えねばならぬ）。ただ筆者としては、bの「はずである」が、モダリティ

論的見地からしても、客体的表現意義を有すると解される事を確認しておきたいのである。

いずれにしても、aの「はずである」は発話時現在の推量であり、bのそれは過去（この場合は「非以前」の運動に対する―高80p）における推量という基本的相異がある事になる。この点でaは、発話者が現在有する何等かの根拠にもとづいて過去の運動の成立を推量するという含みにおいて、現在におけるその運動の成立を肯定的に述べる含意を有する事となる。これに対してbは、問題の運動の成立の推量は過去の根拠にもとづいたもの、という含みから、現在の成立の否定的含意を有する表現となる。

かかる文末述語における「はずだ」の含意は、(1)の現代語訳のごとき連体法的表現の場合は変ってくると思われる。

一応この場合の「た」を既述のごとく、本節述語のテンス表現に対して、相対的過去の表現意義を有するものと考えてみよう。そして、既述のごとくまた、本節末の述語における「た」も、発話時を基準とする相対的過去表現の一種と理解し得るとすれば、前述のごとき終止法での論を援用する事は、必ずしも不都合ではないと考えられる。

(3) a 異論のなかったはずの板垣が五相会議の席上で～言い出した（山本）

b 神社の建つはずだった長岡玉蔵院の山本の生家址は～小公園になっている（山本）

この場合、bの表現は、「はずだ」なる語が本節の終止法の場合と同様、相対的過去の推量さるべき一つの客体的表現内容として、本節の絶対的現在に対応叙述されて、「神社の建つ」運動の現在における不成立の含意は変りないと思われる。これに対してaの場合は、「はずの」を推量モダリティの主体的表現そのものと考えれば、それは発話時現在の話者の推量を表現している事になるが、先に筆者が、すべての語は一つの客体的世界の表現意義を有するとしたるごとく、またモダリティ論からしても、かかる従属節部分は命題的言表事態部分としての一つの客体的表現意義を有するとされるであろうごとく、「異論のなかったはずの」全体を一つの推量的（蓋然的）事態の表現と考えれば、それは本節末に置かれた場合のごとく、絶対的現在の表現意義とはならず、結局文脈に従って、「言い出した」なる本節の絶対的過去の事態に対して、より以前の相対的過去の事態の表現となる。つまり、「異論のなかったはずだった」と同じ表現意義である。従って、「異論のない」時と「はずの」なる推量時との前後関係を別にすれば、本節に対しては、「異論のないはずだった」と同じ、「異論のない」運動（状態）の本節時における不成立を含意する事になると考えられるのである。そして、運動の種類により、「た」が推量語の前に来ても後に来ても、意味の相異が明確にならぬ場合は、(4)結果として、(1)の訳のごとく、両方の現代語表現となるものと思われるのである。次の場合等も同様である。

(4) 大臣の後にていでたちもすべかりける人の世のひがものにて（一180p）

(大)（なし）出世も当然すべきであった人で

(新) 大臣の子孫で出世もしようと思えばできたはずの人なのが

(全) 大臣の子孫で出世もできたはずの人なのですが

(集) 大臣の子孫で出世も出来たはずの人なのですが

(玉) 大臣の子孫で出世もするはずだった人ですが

(大)の訳は一応別としても、他の訳は「た」が推量語の前に来るものも後に来るものもある。この場合、いずれが不当とも言えぬごとく思われるのである。

しかし、現代語の表現意義としては変らぬとしても、原文の訳という点からすれば、いずれかがより忠実という事になろう。一応「き・けり」が「た」に相当するとすれば、「た」を後に置く方が忠実という事になろう。

しかし、実際の訳をみると、(1)(4)の訳に見出せるごとく、「た」を推量語の前に置く方が圧倒的に多い。この点は訳書のみならず、一般の現代語文でより明確である。連体法として「た」が推量語の後に用いられる場合は極めてまれであり、特殊である(表Ⅱ)。そして、この点は本節末の終止法の場合と対照的である。本節述語においては、二通りの表現は共に普通と思われるのである(表Ⅱ)。

しかし一方で、中古語の「べかりき(けり)」の場合を考えてみると、連体法においても終止法においても、「き・けり」が「べし」の前に置かれる場合は見出し難い。見出せるのは「ぬ・つ・たり・り」の所謂アスペクト的表現意義の助動詞である。そして、「き・けり」が「べし」の後に用いられる事は、連体節中でも本節中でも同様に普通である(表Ⅰ)。

かかる「き・けり」と「た」の相異を考えてみると、そこには両者における「過去」表現意義の、ある決定的な相異があると思われて来るのである。以下に論じてみよう。

この場合も、まず本節述語部分の用法で考え、その結果を連体節中の場合に類推するのが適切と思われる。

既論のごとく、現代語の「た」が推量語の後に置かれる場合は、例えば「はずだった」のごとく、上接動詞の運動が推量さるべき(蓋然的)一つの客体的事態として、過去に実在した、という表現になると考えられる。従って「た」における過去表現の意義は、運動自体は蓋然的であるとしても、そういうあり方として「確定」し「事実」として存在したという意義になると考えられる。これに対して、「たはずだ」のごとく、「た」が推量語の前に置かれる場合は、「た」によって過去化された上接動詞の運動の存在を、発話時現在においては推量的(蓋然的)事態であるとして表現するのであるから、「た」における「過去」の表現の意義は、発話時現在としての文全体としては、問題の運動が過去における「確定」した「事実」の存在という表現とはならず、「蓋然的過去」性、「仮定的過去」性の意義になると考えられる。

かかる本節述語部分での「た」における推量語との前後置関係による表現意義の相異を、従属節の連体法表現に類推してみると、その「た」がいずれも絶対的過去ではなく、相対的過去の意義であり、また推量語における推量される時点(蓋然的と判断される時点)は異なるとしても、その「た」と推量語の前後関係からする、「確定的事実的」過去の表現意義か、「蓋然的仮定的」過去の表現意義かの相異の成立は変らぬものと考えられる。

かかる論議の帰結からする現代語「た」の性格は、第一節で述べたごとく「絶対的過去↕相対的過去」の表現区別をそれ自身では有せざるのみならず、「確定的事実的過去↕蓋然的仮定的過去」の表現区別の意義も、それ自身としては有せざる事である。それ等の区別は、専ら文中の位置により、文脈によって決定される、という事である。

かかる現代語の「た」の結論よりする時、それと対照的な中古語「き・けり」の過去表現の意義の一つが推測されて来る。すなわち、先述のごとく、「き・けり」は「べし・まじ」の前に置かれる事がないが、この点は他の推量系助動詞の場合も同様であるばかりでなく、推量系以外の助動詞との相互承接においても、常にその前に置かれる事がないと思われる点[5]において、「蓋然的」乃至「仮定的」過去の表現に用いられる事はないのであって、常に、「確定的」「事実的」過去の表現にのみ使用されたのではないか、という事である。

筆者はかつて、この世界に事実存在するとして表現された情報、換言すれば文の本節述語によって決定された情報を「存在の情報」と名付け、この世界に事実存在するか否か決定されざる情報、換言すれば文末述語によって最終的に決定されざる文中の情報成分を「事柄の情報」と名付けたが（重d等）、現代語の「た」はそのいずれの過去の情報をも表現し得るが、「き・けり」はすべての場合に、「存在の情報」しか表現しなかったのではないか、そういう感覚でしか使用されなかったのではないか、と推測されるのである。[6]

勿論、かかる推測は、微妙な例にも遭遇せざるを得ぬ。先の(1)例においても、解釈の仕方によれば反例となろう。すなわち、この場合の「わりなう思さば」は「仮定」の条件であるから、「べかりし」の「し＝き」も仮定の過去を表現していると考えられる可能性がある。しかし、この場合の「べかりし」は「べくありし」であって、「き」はこの「あり」の過去性を決定しているのであって、「ありぬべし」の「あり」の過去性を直接決定しているのではない、と考えられるのである。つまり、「わりなう思さばさもありぬべし」なる仮定的事態が、過去に「事実」として存在した、という「存在の情報」を表現しているのだ、と考えられるのである。それは、筆者のかかる理屈よりもむしろ、記述した源氏物語作者の、いわば無意識の使用意識であったろうと思われるのである。筆者はかかる「た」に対する「き・けり」の表現意義の相異を、別の根拠から論じておいたので、参照いただければ幸いである（重ａｂ）。

三　「き・けり」の存在情報表現の単位

もう一つの「き・けり」への推測を提出してみたい。

先述のごとく、現代語「た」の従属節中における意義は、それがテンス的に理解出来るとしても、タクティックな相対的過去の表現意義が基本であると考えられるのであり、本節述語における文全体の絶対的テンス表現意義に対しては、相対的意義しか有せざるものと考えられる。その事は逆に言えば、そういう相対的表現意義をも有せざる場合には、「た」が用いられぬのが普通であると予想せしめる。そして、かかる予想に対しては、中古語の「き・けり」がいかようであるかが問題になる。

この点も、中古文とその現代語訳を対照して判明する点があると思われる。

(5)いと忍びて見そめたりし人のさても見つべかりしかはひなりしかば（一78ｐ）

(大)逢い初めた女が、そのままでまあ世話して行く事がきっとできそうだった状態でしたから

(新)（なし）そのようにしてでもきっと関係を続けていけそうだった雰囲気だったから

(全)ごく内緒で逢いはじめた女がどうやらそのまま付き合ってゆ

けそうな様子でしたから
(集)通って行くようになった女がそうした関係を続けてもいいと思われるほどの女だったので
(玉)ごく内緒で逢っておりました女がまずやってゆけそうな様子でしたので

原文では三ケ所「き」が用いられている。最初の「みそめたりし」は、この部分の訳のない(新)を除いて、他の四訳は共通して「た」を当てて現代語訳している。この場合の現代語「た」の意義は、「みそめる」なる運動が、本節の「けはひなり」なる運動(状態)に先行する、すなわち「以前」の表現意義として、相対的過去の表現と考えられる点で、四訳共に「た」を用いているのは理解出来る。また原文最後の「けはひなりしかば」の「しか」も五訳すべて「た」を用いて現代語訳しているが、この場合の原文は、「ば」なる確定条件の接続助詞によって下句に連接しているごとく、山田孝雄氏の言う「句と句とを相結合」する(山331p)接続助詞の上句として、述格の語=述語を有した「文」に相当する単位であり、その上句の本節述語を形成しているのが「けはひなりしか」であると考えられる。従って、現代文としても、ここは上句=文全体のテンスを規定する語が備わるのは当然であり、この部分での訳の「た」の使用の意義は、そのようなものとしての絶対的存在情報的過去の表現意義を担うもの、と了解出来るのである。従って、この部分の「た」による現代語訳は、「みそめたりし」の部分の「た」による訳とは別の意義において当然と考えられる。

問題は「みつべかりし」の「し」の訳である。これをそのまま「た」によって現代語訳したのは、(大)と(新)であり、他の三訳は「た」を用いていない。原文に忠実ならんとすれば、「た」を用いるのが当然という事になるかもしれぬ。しかし、この場合の(大)と(新)の訳は、現代語としてはいかにも不自然であり、他の三訳の方がかえって自然であると思われる。この点で、何故前者が不自然に感じられるのかを考えてみる。

既述のごとく、現代語においては、従属節中の「た」は本節の述語の絶対的テンス表現意義に対しては基本的に相対的意義しか有しないのであり、従ってそういう相対的表現意義さえも有せざる場合には、使用されぬのが普通であると予測してみると、問題の「みつべかりし」の「みつべかり」なる運動(状態)の時は、本節の「けはひなり」なる運動(状態)の時と「同時」であり、アスペクト的意義をも想定し得ぬ(7)まさに「状態」として同時である。そして、その共通の絶対的時は、本節における述語の「た」によって現代語訳され表示されているのである。従って、「みつべかり」なる連体節に、わざわざ時を表示する必要はないのだ、と了解されて来るのである。ここに、(大)と(新)の現代語訳としての不自然さが生れるのではないか、と考えられるのである。あたかも左例のaが不自然なるごとく。

(6)aかわいらしかった女の子がいた。
　bかわいらしい女の子がいた。

別の例を提示してみよう。

(7)あいなく人の誇りも侍りぬべかりし折なりしかば(五202p)
(大)世間の人の非難も、かつて面白からず、きっとござるに相違なかった女二宮との婚姻の当時であったから
(全)あいにく世間からとやかく言われそうな時期でございました

から

(集)折悪しく、世間からとやかく言われそうな時でしたので

(玉)折あしく世間からうるさく言われそうなときだったので

(新)はこの部分の訳がないのであるが、この場合、「べかりし」の「し」を「た」を用いて訳したのは(大)のみである。一面で原文に忠実なる訳のごとくでありながら、現代語としては不自然であると思われる。原文の最後の「折なりしかば」の「しか」が、(大)を含めて四訳すべてが「た」を用いて現代語訳しており、しかも現代語訳として自然と思われる事と対照的である。この場合の不自然・自然の理由も、前の(5)の場合と全く同様であると考えられる。

かかる、現代語訳における文(句)全体の情報の時制表現を本節末の述語によって代表させんとする傾向は、一般に連体節末の連体法としての「た」の不使用という点に現われている(表II)が、その事はまた、次の原文と訳文の相異からも見出せる所である。

(8)かくてもいとよく思ひすましつべかりける世を。はかなくもかゝづらひけるかな(四197p)

(大)こんな状態でまあ、全く十分に、たしかに悟り諦める事のできるのであった世の中であるのにねえ。

(全)こうして暮していても殊勝に行いすまして過ごそうとすればそれができたこの人生だったものを

(集)このように独り住みでも殊勝に行いすまして過せる人生だったのに

(玉)このように殊勝に行いすましていられる世だったのに

原文に忠実な訳たらんとすれば、(大)が一番近い「た」の使用と考えられるが、現代語としては不自然であろう。その点では(集)・(玉)の方が原文の表現には不忠実のごとくでありながら、現代語としてはかえって自然であると思われる。(全)もそういう自然さを取り込まざるを得ず、結果的に二ケ所の「た」の使用となったものと思われるのである。

さて、かかる訳文に見られる、原文の「き・けり」の「た」を使用した現代語訳の、自然と不自然の様相は、既述のごとき現代語の「た」の使用意義を知らせてくれると同時に、逆に、現代語としては不自然なる場合にも「き・けり」を用いて時を表現した、中古語の時の表現法が、いかなる基準にもとづいたものであるかを推測せしめる。

既述のごとく、「べかりし(ける)」なる連体法の「き・けり」の使用は、終止法の使用に対して決して少くない(表I)。いわば普通に使用されている。しかも前述のごとく、その連体法によって表出された運動の時が、本節の述語の運動の時と全く区別する必要なき同時の場合、つまり(6)aの現代語に相当するごとき場合でも、中古語では普通に「き・けり」が用いられる、と予想されるわけである。そして、この点からまた次のごとき推測が成立するごとく思われるのである。

すなわち、中古語では現代語と異なって、叙述される情報の絶対的存在情報的時制の表現を、現代語のごとく、文(句)単位で行うのではなく、文中の情報のまとまりごとに、その成分単位ごとに行う傾向があったのだ、と。

かかる傾向は、実は「き・けり」における「過去」の表現のみではない。筆者はこの点で、別稿で論じた(重a)中古助動詞「む」の連体法における「未来」テンス表現性を証例として提出する事が

出来ると考える。

すなわち、「む」は現代語の「う」や「だろう」に近い意義を有すると考えられるが、現代語の「う」や「だろう」は連体法として文中に用いられる事はほとんどない。しかし「む」は、その連体法において、終止法におとらず、古代においては極めて普通に用いられたものと思われる。この事について筆者は、それが発話時を基準とするダイクティックな絶対的「未来」のテンス表現意義を有すると論じた。つまり、かかる連体法の「む」も、先に論じた「き・けり」の連体法と同様に、その受ける情報表現の成分単位ごとに（勿論それは、その折々の発話者の必要意識による単位であって、形式文法的に決定出来る単位ではない）、その発話時からする絶対的「未来」を表現した、と考えられるのである。その点で、「き・けり」と同様の、中古の時の表現法の体系の中にあったものと考えられるのである。

四　「き・けり」の表現性と中古語の性格

以上のごとく筆者は、「べかりし（ける）」なる連体法に見出せる「き・けり」を、その現代語訳としての「た」の使用に対比考察する事によって、「き・けり」における「絶対的過去」表現性と「存在の情報」表現性と共に、「情報成分単位ごと」としての時制表現性を推測した。この点で、現代語の「た」の意義や使用法と対照的であると考えたのである。

それでは、何故かかる時の表現の相異が生じているのであろうか。この点においても、既稿において（重b・c）、概観的に推測言及して来た。本稿で更に具体的に述べてみよう。

「文」なる単位を、書記言語としてしか参照し得ぬ中古文において、一応今日の研究者によって句点の付せられたひとつづきの叙述のまとまり、と考えた場合、そのような「文」としては、現代文より中古文の方が一般的には「長い」と思われる。ただし、その長さは必ずしも字数で比較する事は出来ぬ。筆者が長いとみるのは、その「一文」と目される叙述の中に、先引の山田氏の「句」に相当する単位が、現代文より一般に多く、しかもそれが、山田氏の言う「有属文」的ではなく、「合文」乃至「重文」的に連接している、という点である。従属節本節的軽重のない接続助詞的なものでの連接が多い、と言ってもよい。

(9)おぼえいとやむごとなく上衆めかしけれどわりなくまつはさせ給ふあまりにさるべき御遊びの折〳〵何事にも故ある事のふしぐ〳〵にはまづ参う上らせ給ひある時には大殿籠り過ぐしてやがてさぶらはせ給ひなどあながちに御前去らずもてなさせ給ひし程におのづからかろきかたにも見えしをこの御子生れ給ひて後はいと心ことにおもほし掟てたれば坊にもようせずばこの御子の居給ふべきなめりと一の御子の女御は思し疑へり（一29p）

右の例は、割合としては接続助詞的なものの使用も少なく、全体としても叙述のまとまりはよいものと思われるが、それでも相当「句」的な単位の連続した文だと思われる。勿論書記言語であり、概しては女流作品にかかる傾向が多いので、すべてを一律に評する事はさしひかえねばならぬであろう。しかし、一般的に、現代文としては句点を打って切る所を、切らずにどこまでも続ける傾向があると思われる。これを口頭発話をも視野に入れて推測するならば、中古語においては、「文」としての単位意識・構文意識が現代語ほど

には明確に働いていなかったのではないか、と思われるのである。先の(8)例等も、「べかりける世を」の所では、叙述内容上現代人ならば「文」として述語を入れて独立させる所であろう。そういう思いが、既引のごとき諸訳となって現われたものと思われるのである。

かかる、「文」としてのまとまりと独立性の明確ならざる中古文の状態が、書記言語のみならず、口頭発話的な場合にも似た状態であったとするならば、既述のごとき「き・けり」の「た」と異なるテンス表現の意義が、中古に必然的であった理由の一つが、推測されて来るわけである。すなわち、中古においては、現代語のごとく、「文」単位で、その文末の述語によってまとめて、その情報全体の、発話時よりする絶対的存在情報的過去性を表現するやり方では、妥当に情報の時を伝える事が出来ぬごとき、そのような「文」構造であり、「文」意識だったのではないか、と思われるのである。かかる推測の一つの根拠として、筆者は、中古文において現代語に比して接続助詞の形態、役割のより明確と思われる事を、別に論じておいた(重b・c)。

注

(1) 以下論著の引用は次の傍線部の略称による。工藤真由美〈アスペクト・テンス体系とテクスト〉佐田智明「『はず』と『つもり』」北九州大学文学部紀要10 重見一行a〈助動詞の構文機能研究〉第四章第一節 b「現代語助動詞『タ』の表現意義」兵庫教育大学研究紀要19 c「『から』と『ので』の構文的機能の相異について」語文65 d〈日本語の文法を考える〉鈴木泰〈古代日本語動詞のテンス・アスペクト〉高橋太郎「『はずがない』と『はずじゃない』」言語生活288 中畠孝幸「不確かな伝達」三重大学日本語学文学3 仁田義雄〈日本語のモダリティと人称〉丹羽哲也「過去形と叙述の視点」国語国文61の9 益岡隆志〈モダリティの文法〉松木正恵a「『〜はずだった』と『〜はずがない』」早稲田大学教育学部学術研究42 b「時制と視点」同右43 山田孝雄〈日本文法学概論〉

(2) 工藤氏は文末述語における「た」の用法について、基本的に絶対的過去の表現意義を認めながら、パーフェクト現在やパーフェクト過去の意義を認める。しかし筆者は、かかる文末述語におけるパーフェクト的意義は、文脈的意義であって、「一文」として文法を考えるならば、すべては絶対的過去の表現意義として理解出来ると考える。

(3) 阿川弘之〈山本五十六〉(新潮文庫)

(4) 「相異」は主として上接動詞の種類によって明確となる。工藤氏分類の「内的限界動詞」がそれである。次のBのごとく。

A頭が痛かったはずの彼が出席している。
頭が痛いはずだった彼が出席している。
B学校に行ったはずの彼に出会った。
学校に行くはずだった彼に出会った。

(5)(6) 万葉集等古代の和歌に現われる「けらずや」なる表現、また「せば(〜まし)」等が問題になろう。これ等については、種々議論のある所でもあるが、ここで論ずる事はしない。筆者としては、語源等通時的な議論ではなく、中古において、「き・けり」に対して、一方で「ぬ・つ・たり・り・けむ・まし」のごとき助動詞が併用されたという、その役割分担としての表現体系を問題にしているのである。

(7) 従属節からの完成相「た」の連体法による連接において、その運動と本節の運動が「同時」の場合に、工藤氏は「限界達成後」のごときアスペクト的意義を認めている(工25P)

——就実女子大学教授——